

【エントリー情報】

自治体名：静岡県榛原郡川根本町

学校名：川根本町立中川根中学校（※2024年4月 三ツ星学園になりました）

ご記入者：森下寛子

【設問】

① 貴自治体・貴校で目指している目標（ビジョン）・目標に至った背景・想いを教えてください。

（1,500文字以内）※可能な限り自治体や学校全体の目標をご記入ください。

全小中学校で児童生徒数の減少が予測されている川根本町では、「小規模校のメリットの最大化、小規模校のデメリットの最小化」を合い言葉に中山間地域のモデルの創造を目指している。

2017年度、川根本町には小学校4校、中学校2校あり（来年度から義務教育学校2校）、iPadを1人1台配備した。2017年から5年計画でICT教育推進事業に着手、全教室、グラウンド、体育館にWi-Fi配備、大型提示装置の全教室および特別教室分配備している。iPadは小中学生全員に同時に配備し、持ち帰りも実施している。また、iPadは、小学校入学時から中学校卒業まで自分のものとして活用している。サポート体制にも力を入れており、町内に本社があるCBBSがインフラを支援、ICT支援員が月に複数回勤務している。ICT支援員は、授業補助、情報モラル指導サポート、教材作成、校務情報化支援などを行っている。また、ガイドラインの情報教育の中で指導計画が定まっているため、系統性を意識した指導ができるようになっている。

現代の子どもたちにとってICTは、環境の一部になっている。町や学校がICT環境を整えていくことは、社会生活での活用にも生かされることにつながる。そのため、ICT活用を推進していくことは、子どもたちの可能性を広げていくことになる。それ故、情報モラルに対する知識と意識の向上を高めながら、各教科学習や委員会など教育活動の中で、子どもたちがICT機器を文房具のように自分で選択できるようにしていきたいと考えている。

② 目標（ビジョン）に向けた具体的な個人のお取り組み・学校全体でのお取り組み、学校の枠を超えて市や他校へ広がったお取り組みや、その中で発生した課題や苦勞を教えてください。

（1,500文字以内）

川根本町内の学校に勤務して5年目になる。令和元年度末から世界規模でコロナウイルス感染症が広がり、緊急事態宣言や突然の休校によって、子どもたちだけでなく私たち教職員も「学習を進められない」「教育ができない」という不安と虚無感に襲われた。私は、研修主任として学びを保障するためには校内研修を再構成していく必要性を感じ、ICTと協働学習を効果的に組み合わせることによって子どもたちに学びの実感を味わわせることができないか考えていくようになった。

令和2年度は、研修主任として率先して「ミライシード」を活用した授業を行い、職員に授業の様子や子どもが作成したものを紹介した。特に「オクリンク」に自分の考えを示し、大型提示装置にクラス全体の考えを映し出し、それを元に話し合いを行った。これまでは班の隊形になって話し合っていたが、コロナ禍によってそれが不可能になってしまった。そこで友達の考えを全体で共有する際に、「オクリンク」や「ムーブノート」を活用することができる良さを実感することができた。また、自分の最初の考えと話し合い後の自分の

考えを比較することで自分の学びを振り返ることも有効だと感じた。

令和5年度に中学校に異動したが、系統性を意識した指導計画書が全教職員に配られていることにより、教職員には身につけた技能を生かしたり発展させたりしながら ICT 機器を使っている姿が見られる。現在では、コロナウイルス感染症も5類になり、班の隊形で話し合うこともできるようになってきたが、「オクリンク」や「ムーブノート」を使って考えを共有したり情報を収集したりすることによって班での話し合いも深まりが生まれている。また、総合的な学習の時間（探究活動）や委員会活動、部活動でも ICT 機器を有効活用している姿が見られる。「ICT 機器を文房具のように自分で選択して使用する」ということを教師自身も率先して行っている、子どもたちにそういった姿を見せていることが、社会生活での活用を促し、子どもの可能性を広げることに繋がっている。

③ (3-1) ICT を活用することで、先生のご指導や働き方、児童・生徒の学び方や学習への態度、学習成果などにどのような変化があったか、またこれらの変化をどのように評価されているか教えてください。（2,000文字以内）

令和2年度以降から様々な教科で「オクリンク」「ムーブノート」を使っていくなかで、子どもたちの中から「考えを見合って、意見を入れてくならムーブノートの方が良いじゃないか」「何枚もスライドを作りたいからオクリンクの方が良い」といったように、用途に合わせて選択していく姿が増えてきた。ICT 機器と協働学習を組み合わせることによって学びの深まりを実感することができた。

令和5年度から中学校に異動し、教科の専門性が小学校の時よりも求められている。ICT が充実しているおかげで、資料の提示方法の選択肢が増えた。デジタル教科書や資料集の二次元コードには、生徒たちの興味関心を引く資料がたくさんある。今までは、教師が様々な書籍やインターネットの中から写真資料や動画資料を探したり保管したりしておかなければならないという大変さがあったが、ICT 機器を活用することで、資料を探す時間を大幅に削減することができた。また、授業で使う資料を配付したい時は、配付したい資料や資料の量によって「ミライシード」の「オクリンク」や AirDrop などのツールを選択できる。これまでは印刷しなければいけない、個人に渡したいけれど渡すことが難しいなどの困り感があったが、ICT 機器のおかげでその困り感が解消された。

生徒たちは、タブレット操作に慣れているため、学習面でも ICT 機器をよく使っている。レポートや新聞作りなど文章を書く課題に対して、手書きよりタブレットの方が負担が少ないため、生徒が書く文章量が多くなったと感じる。また、漢字が苦手な生徒は、タブレットで下書きを書いたり、読み上げ機能を使って画面に書かれていることを聞き取ったりすることで学習に対する困り感を自力で解消しようとしていた。部活動では、自分のフォームを動画に撮り、成果と課題を分析したり記録を蓄積したりするなど、タブレットを効果的に活用している。

様々な理由で学校が休校になった時には、Zoom で生徒と学校をつなぎ、授業や委員会活動の打ち合わせを行うことができた。「オクリンク」で課題を配信する、画面を見ながら一緒に問題を解いていく、わからないところはチャットでやりとりをするなど、その場に合った対応が教師も生徒もできていた。

iPad が川根本町に導入された当初、「ICT を使わなくても教育はできる」「使い方がわからないから使わない」「わからなくて時間がかかってしまうから使わない」といった教職員が多かったように思う。しかし、必

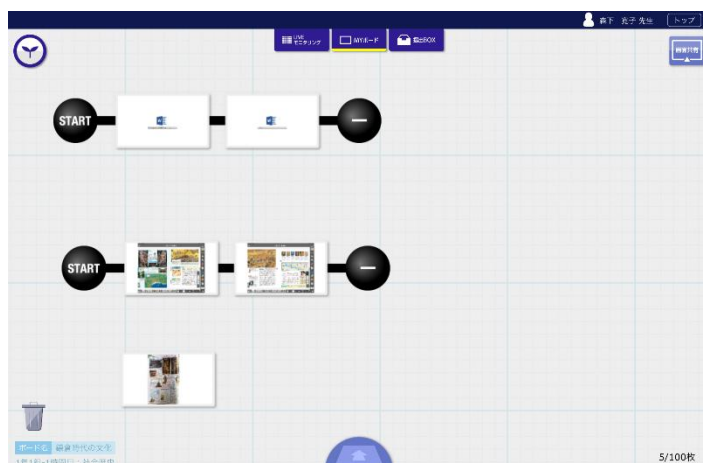
要に迫られたときに、川根本町の充実した ICT 環境にサポートされ、積極的に ICT 機器を使っていったことにより、ICT 機器の良さを自覚した教職員が多かった。良さを実感した教職員が ICT 機器の活用の場面を広め、教育活動で積極的に使用した結果、子どもたちも ICT 機器の良さを実感することができた。教職員も児童生徒も、ICT の良さを実感しているから様々な場面で活用している。そんな場面を見ると、「まずはやってみる」「良さを実感する」ということが大切だと感じている。

④ お取り組みの中でのミライシードの活用画面・活用機能お取り組みの中でミライシードが役立つ場面・活用頂いたアプリ/機能を教えてください。

※活用エピソードが複数ございましたら、文字数制限内でご記入ください。1 つのエピソードに絞る必要はございません。(2,000 文字以内)

休校中、児童生徒の健康状態を「オクリンク」上で提出することによって、児童生徒の健康状態が把握できたため、毎回、担任が電話連絡して確認する必要がなくなった。

令和元年度の突然の休校時は、休校中に取り組む課題を大量印刷するのに時間も労力もかかっていた。突然の休校により、教科書を持ち帰っていない児童が多かった。しかし、現在は、突然の休校で教科書を持ち帰ってなくても、必要なページを「オクリンク」を使って送ることができる。さらに、Word で作成した資料を配付すれば、生徒たちは Word を開いて課題を進め、「オクリンク」に貼り付けて提出することができる。提出ボックスを見れば、生徒が提出したのか確認ができる。また、提出された物を確認できるため、教師の仕事時間も短縮された。



中学校の道徳では、「ムーブノート」の「選択肢」機能をよく使用している。生徒たちがどの考えを選択したのか集計がしやすく、選択肢の横に理由を書く欄を設け、「ひろば」に提出することで、同じ選択肢を選択していても理由が違う、理由は同じだけれど選択肢が違うなど多様な考え方を共有することができる。また、「導入」「最初の考え」「話し合ったあとの考え」などをタブにより分けておくことで、授業の最初と最後に生徒の考えがどのように変容したか読み取りやすい。



社会科の歴史の学習では、同じ資料を提示し、気がついたことを「ムーブノート」に書かせた。「キーワード」機能を使って「ひろば」に提出された考えを分類することで簡単に共通点を見つけ出すことができ、グループ分けをする際にも多くの時間を要しなかった。

社会科の地理の学習では、学習課題に対して、生徒一人ひとりが予想したものをまとめ、「オクリンク」で配付した。みんなの予想の中から、この予想を検証したら学習課題に対する答えが出せる！というものを選び、自由進度学習の形で進めていった。どの予想の検証から行っていくのか印をつけさせ、「オクリンク」に提出することで生徒たちの学習状況を把握することができた。また、「ムーブノート」には、予想ごとにタブを作り、自分が検証したことをまとめ「ひろば」に提出するようにした。提出されたものを見ると、自分が調べた内容やその根拠になる資料を添付している生徒もいた。生徒たちが、たくさんの予想を立てたため、すべての予想を検証していくのは難しい。しかし、「ひろば」を見れば、クラスの誰かが予想を検証しており、友達の考えを見る、共有する、疑問を「チャット」を使って聞くことができる。自分一人だけの考えだけでなく、友達の考えも見ながら、学習課題に対する答えを考えることができた。